

《論 文》

中央アジアの困難なロシア離れ
—ロシアのウクライナ侵攻に寄せて

高橋 巖根

Central Asian Detachment from Russian Influence
—Thorny Road Ahead

IWANE TAKAHASHI

キーワード

ロシアのウクライナ侵攻 (Russian Invasion into Ukraine), ウラジミール (Vladimir), プーチン (Putin), 疑似歴史 (psevdoistoriia), アトランティズム (Atlantism), ドストエフスキー (Dostoevsky), レフ グミョリフ (Lev Gumilev)

2022年2月24日、中央アジアが属する旧ソ連地域で大きな出来事が起きた。ロシアによるウクライナ侵攻である。以来、この稿を執筆している11月まで数多の報道があり、識者によるさまざまな角度からの分析が続いている。だが、その中で中央アジアに言及するものはわずかである。ウクライナ侵攻の主題はヨーロッパの安全保障であり、同じ旧ソ連地域とは言え、ヨーロッパと言ってよいかどうかは微妙な中央アジアとの関連を考慮しないのは常識的な考え方もかもしれない。

しかしながら、今回の出来事に関して、ロシアやウクライナが中央アジアと同じ空間を共有する側面がない訳ではない。それは、この侵攻に関するロシアの動機に関連している。

この半年ほどの報道の中でもしばしば言及されていたように、プーチン大統領は2021年7月12日付で「ロシア人とウクライナ人の歴史的な同一性について」と題する論文¹⁾を発表している。プーチンはこの論文の中で、古代ルーシから現代に至る東スラブの歴史を振り返りながら、ロシア・ウクライナ・ベラルーシの民族的な一体性を訴えている。東スラブ、すなわちロ

シアはモンゴル、リトアニア、スウェーデン、オスマン帝国といった外敵と戦い、モンゴル時代のように時には長期的な支配にも甘んじたが、こうした一体性が損なわれることはなかった。現在のウクライナの地はリトアニアによる支配を受けたが、その後、ロシアによって「解放」されることになった。歴史の中の紆余曲折を通じてウクライナには地域的な言語や文化が生まれたが、それはあくまでも地域的なものであり、ロシア語とロシア文化の枠内に収まるものである。

プーチンが語る歴史の当否はさておき、彼の語り口は中央アジア考古学の碩学であったエドヴァルド・ルトヴェラゼの指摘を思い起こさせる。ルトヴェラゼによると、旧ソ連諸国の政治的傾向の一つとして「民族的排外主義」が見られるが、それには次の4点の主張が含まれる。

- (1) 当該民族による国家は太古の昔から存在した。
- (2) 当該民族、および彼らの民族意識もまた古くからある。
- (3) 当該国家と当該民族の分布の境界は、現

にあるものよりも大きい。

- (4) 自民族を過剰に称賛し、他民族を見下す。

しかも、これらの主張を行うのは多くの場合、一国の最高指導者であり、彼らが展開する言説はしばしば科学的な歴史研究よりも影響力が大きい。つまり、これらの国々では歴史に関しても専制主義的であると言える。ルトヴェラゼはそのような歴史を「疑似歴史(psevdohistoriia)」と呼んでいる。

このような特徴は、プーチン大統領による上記論文の中にも容易に見出すことができる。ロシアとウクライナを含む東スラブの起源はウラジミール1世によって正教信仰が受容された10世紀末に遡る。彼らの同族意識は正教信仰とともに現在まで続いている。東スラブの領域は現在のロシアよりは小さいものの、ウラル以西のヨーロッパ・ロシアを越えている。そして、この歴史観においてはウクライナと中欧（特にポーランド・リトアニア）とのつながりは過小評価されている。

同様の傾向はロシアのみならず、いくつかの旧ソ連諸国においても認められる。独立後のウズベキスタン为例にとって言えば、次のようになる。ウズベキスタンを文字通り「ウズベク人の国」とすれば、その歴史はこの名を冠した遊牧ウズベク族が現在のウズベキスタンを支配するようになった16世紀以降ということになる。しかし、独立後のウズベキスタンにおいては初代大統領であったイスラム・カリモフの主導のもと、同国の歴史を可能な限り古く遡るものとして捉えている。例えば、ゾロアスター教の開祖ザラスシュトラは中央アジア出身との説もあるが、同国においてはゾロアスター教の聖典『アヴェスター』は（『アヴェスター』がイラン系言語で書かれ、ウズベク人がテュルク系であるにも関わらず）ウズベキスタンの精神文化を表すものとして捉えられている。この想定に従うと、紀元前1千年ごろ以降のウズベキスタンにウズベク人が存在し、彼らが自分たちはウズ

ベク人であるという意識をもっていた（その証明が『アヴェスター』）ということになる。

また、独立後のウズベキスタンでは、民族的な英雄としてのティムールと彼が創りあげた国家であるティムール帝国が高く評価されている。なぜならば、ティムール帝国は現在のウズベキスタンの領土をすべてカバーしつつ、さらにそれよりも大きな版図を実現していたからである。さらに、ティムールの軍勢はその版図を越えて、ロシアを支配していたジョチ・ウルスのトフタミシュ軍を現在のロシア領にあたるコンドゥルチャ川の戦い（1391年）で痛撃し、さらに、オスマン帝国に対してはアンカラの戦い（1402年）で敵方のスルタンであったバヤズィト1世を生け捕りにするなど、大いに武名をとどろかせていた。このようにティムールの輝かしい戦績を称揚することは、現在の後継国家であるロシアやトルコに対して密かに歴史的な優越感を感じることもつながるのである。

ルトヴェラゼは、旧ソ連諸国に共通する政治的傾向としての民族的排外主義に言及しているのだが、捉え方によってはそれは旧ソ連の枠を越えてさらに広い地域において共有されていると言えるかもしれない。その一つの例は韓国に見出すことができる。韓流は世界的に人気を博しているが、その一ジャンルである時代劇ドラマ（韓国語では「史劇（サグク）」）にも民族的排外主義が見られる。その典型的な事例は、2000年代後半から2010年代前半にかけて盛んに製作された古代史劇である。『朱蒙』、『大祚榮』、『太王四神記』などであるが、これらのドラマが語るところによれば、韓民族国家は檀君神話の時代から古朝鮮を経て高句麗・百濟・渤海などに受け継がれた。この三国家はいずれも現在の中国東北地方に起源をもつものであり、その構成民族の中にもツングース系も含まれていた。また、その支配領域は朝鮮半島を大きく越えて大陸に広がり、満州のみならず万里の長城付近や、場合によっては中原にも達していた。以上がドラマの中にみられる歴史言説であるが、この問題はドラマの枠内に収まらず、当

時外交問題にも発展した。中国政府は、中国の周辺地域の歴史を中華帝国の枠内で捉える歴史工程を進めているが、東北地方に関しては東北工程を進め、高句麗や渤海を中国の地方政権として位置付けた。これに対して韓国政府が異議を唱えたのが外交問題となったのだった。

ここまでロシア、ウズベキスタン、韓国の民族的排外主義の傾向について見てきたが、これらは類似の特徴を示しながらも、その起源においてはそれぞれまったく異なるところから生じたものである。ロシアに関しては主としてユーラシア主義、ウズベキスタンに関しては1940年代以降のウズベク歴史学の展開、韓国に関しては性理学（朱子学）の世界観がもたれている。

ロシアの民族的排外主義の思想的背景はユーラシア主義であると言われるが、ユーラシア主義はその名の通り「ユーラシア」という空間に基づいた認識である。この場合の「ユーラシア」とは、ヨーロッパとアジアの総和のことではなく、ヨーロッパとアジアにまたがりロシアとロシアが支配した地域のことである（近年、中国とその周辺地域を合わせて広域的に「東部ユーラシア」と言う用語があるが、それに倣って言うならば「北部ユーラシア」と言ったほうがいいかもしれない）。つまり、それは中央アジアを含みつつ、北部ユーラシアの一体性を強調するものである。なぜそうした一体性が求められるのかと言えば、西欧世界に対抗するためである。

ロシアの文豪ドストエフスキーは、ユーラシア主義の思想家の一人ともされる。彼は、『作家の日記』（1873～1881）の最後で次のように述べている。『日記』の最終部分である1881年1月は、中央アジアで最後までロシアに対する抵抗を続けていたトルクメン人（テケ部族）がギョクテペの戦いで敗れた月であった。ドストエフスキーはその翌月初めに亡くなるので、この部分は彼の最晩年の言葉ということにもなる。ドストエフスキーはギョクテペの勝利をもたらしたスコーベレフを讃えつつ、目の前に広

がる広大なアジアを思い浮かべる。ロシアにとってのアジアは、ヨーロッパにとってのアメリカのようなものである²⁾。ロシアはこの新しい世界に意欲を燃やすことによって、永く失われていた精神と力の高揚を取り戻すのである。アジアに果たしてそれだけの価値があるのかという懐疑論に対しては、次のような答えが与えられる。「ヨーロッパではわれわれは居候であり奴隷でしたが、アジアには主人として登場するわけです。ヨーロッパではわれわれは韃靼人（タタール）でしたが、アジアではわれわれだってヨーロッパ人です」³⁾。つまり、アジアにおいて文明普及者になるのがわれわれロシア人の使命なのだ。

ドストエフスキーのこの言葉には、ロシア人がもつ複雑な感情と認識が込められている。ロシアには、ヨーロッパに対する劣等意識とそこからくるルサンチマンがある。そのような劣等意識を払拭するための空間がアジアなのであり、ロシアはアジアと一体化してユーラシアになる時にヨーロッパと対等になり、あるいは、それを凌駕する可能性すらもつのである。

ドストエフスキーが最後に残した言葉は19世紀末のものであるが、同様の状況とそれに対する認識は今日でも変わらない。ロシアがウクライナに侵攻した背景にはNATOの東方拡大に対する反発があると言われているが、それはロシアにとって単なる政治的リアクションではない。ロシアにおいては、NATOの東方拡大は「アトランティズム」の現れであるとみなされている。「アトランティズム」⁴⁾、NATO（北大西洋条約機構）の「大西洋」に「主義」を付けた造語である。この言葉は、ソ連時代以来、ロシアに対抗する大西洋諸国とNATOによる敵対関係を意味する。一般的な報道では「NATOの東方拡大」という表現が用いられるが、それはそのような国際政治的現象、あるいは行動を表しているに過ぎない。それに対して、「アトランティズム」という用語では、それがあたかも一定の意味をもった動きのように捉えられている。この言葉には、西洋のロシア

に対する蔑視に対する反発が込められている。

ロシアのヨーロッパに対する反発を支えているのがユーラシアという空間であるが、そこには二重の蔑視が関わっている。ロシアはヨーロッパから蔑視を受けているが、それを跳ね返すためにアジアを利用し蔑視する。ロシアにとってのアジアは結局、ヨーロッパに対峙する際の背景にしか過ぎず、ロシアの「居候」ないし「奴隷」に他ならない。

それでは、当の中央アジア側はこれをどう見ているのだろうか？中央アジアはロシアが自分たちを見下していることをよく知っているが、それに対する抗議申し立てをするということは稀である。心の中でどう思っているかはともかく、少なくとも表面上はこれを問題とすることはあまりないのである。なぜならば、この地域はロシア支配のもとで近代化し経済的にも発展してきたからである。欧米諸国から遠くアジアの内陸部にあって、欧米からの直接的な接触や交流が難しかったため、間にあるロシアを通じて知識を吸収した（20世紀初頭にはオスマン帝国など、他の地域からも影響を受けたが、それは比較的短期間に終わった）。加えて、ソ連時代には「民族友好」の標語のもと諸民族間の交流が促進され、各民族が（現実にはさまざまな格差はあれ）社会主義体制に等しく参画するという状況が作り出された。その記憶は独立後もある程度残存していて、民族間の不和や衝突がある程度は抑制する働きをしている。

いわゆるロシア世界（在外ロシア人も含めたロシア語圏全体を指す）にとってロシア語はそれを支える最も重要な要素の一つであるが、中央アジアにとってもこの言語はロシアとの関係性において重要な位置を占めている。帝政時代からソ連時代にかけてロシア語は地域住民に対する教育言語であったが、現代においてはインターネットにおける使用言語となっている。この地域においては（カザフスタンのように政府がある種の英語化政策⁵⁾を進めている国もあるものの）、インターネット上でもロシア語への需要は大きい。そもそも各国の人口がそれほ

ど大きくないため（最も大きいウズベキスタンで3000万人余りで、最も小さいトルクメニスタンで600万人弱）、各言語の市場そのものが小さい。また、国によっても異なるが、ロシアに比べても言論の自由がないため、地域言語を通じては有用な情報が得難い場合もある。

ユーラシア主義の中にも中央アジアとの関りを示すものがある。中でも最も関りが深い思想家はレフ・グミリョフである。彼は共に高名な詩人である両親のもとに1912年に生まれた。彼はその生涯において相当な期間を強制収容所で過ごしているが、第二次世界大戦後の一時期にはカザフスタン中部のカラガンダ周辺にあった強制収容所に送られ、そこで九死に一生を得るような病体験をしている。独立後のカザフスタンにおいては、初代大統領であったヌルスルタン・ナザルバエフにより彼の名前を冠した大学（L.N.グミリョフ名称国立ユーラシア大学）が創設されたが、同大学はこの国を代表するトップ校の一つとなっている。グミリョフはユーラシア的な歴史空間を前提にしながら、ロシア帝国はモンゴル帝国の後継国家であるとしている。

ロシアによるウクライナ侵攻後、中央アジアなどロシアの同盟国とみられていた旧ソ連諸国の中からも、ロシアに対する反発の声が上がっている。カザフスタン、アルメニア、タジキスタンなどの国々である。こうした国々はソ連崩壊後も続くロシアのこの地域でのプレゼンスに配慮して、これまで公然とロシアに異を唱えるということを控えていた。その箍（たが）がここにきて、かなり緩くなっているようにみえる。

こうした現象を指して報道上、「ロシア離れ」という言い方がなされている。しかし、これはやや表面的なとらえ方であるように思われる。

そもそも、中央アジアではウクライナ侵攻のはるか以前から「ロシア離れ」が進んでいたという言い方もできる。ソ連崩壊とは、中央アジアが突然、ロシアやソ連のヨーロッパ地域から引き離された出来事であった。中央アジアはそ

れまでこうした地域に対して、経済的にも社会・文化的にも大きく依存していた。とりわけ現地系民族以外の民族（ロシア人、ドイツ系、朝鮮系、アルメニア系など）の貢献は大きかったが、これらの人びとからかなりの人数が民族的な故郷（ロシア人ならロシア、朝鮮系なら韓国）、あるいは欧米諸国に移民していった。独立に至るまでこれといった独立運動も体験せず、さしたる準備もなかった中央アジアでは低迷や貧困が続いた地域が多かった。このように中央アジアは1990年代において強制的に「ロシア離れ」を体験していた。

そうした厳しい環境の中で、中央アジア各国は新しい国家体制を築いていった。それは各国地域の文化伝統を基盤としたナショナリズム体制であった。ソ連体制とは異なる新しい体制の建設は、それ自体がある意味「ロシア離れ」を表しているとも言える。

その象徴的な事例の一つ挙げるとすれば、各国の公用語となっている地域言語の文字表記の問題がある。独立後、各国では自国の公用語（カザフスタンであればカザフ語、ウズベキスタンであればウズベク語、等々）をどのような文字で表記するかが議論となった。ソ連時代（の後期）においては、各言語はロシア語と同じキリル文字で表記されていた。独立直後もその状態が続いたが、ある時期から別の文字体系への移行が進み始めた。最も早かったのがトルクメン語である。トルクメン語は、トルコ語やアゼルバイジャン語と同じ系統の言葉（オグズ系）であるため、20世紀初頭からすでにローマ字を採用していたトルコ語に倣ってローマ字への移行を早々に完了した。これに続いたのがウズベク語で、ローマ字の初等教育への導入から始めて、段階的に適用範囲を拡げ、現在ではかなりその範囲が広がっている。カザフ語やキルギス語では今後同様のプロセスが進行していくことになっているが、まだ先のことである。これらテュルク系諸語においては、ロシア式のキリル文字からトルコ式のローマ字への移行が大勢となっている。一方、中央アジア唯一のイラ

ン系言語であるタジク語は系統的にはペルシア語とほぼ同一の言語であるため、ペルシア語同様、アラビア文字を使用することが検討されているが、実現時期は未定である。

しかし、各国政府による独立国家体制への移行は概して緩やかなものとなっている。これは、帝政・ソ連時代を通じて築かれたロシア依存が根強い一方で、ロシア以外の国や地域との関係強化が容易でないことに一因がある。ロシア以外の選択肢としては、最も大きなものとしては欧米諸国と中国がある（中東、インド、日本、韓国等も選択肢ではあるが、ロシアに代わるものにはなり得ないであろう）。

このうち、欧米諸国はソ連崩壊後しばらくは体制移行のための支援を積極的に行ったものの、この地域の人権・民主化状況が改善しなかったため、関係もあまり深まっていない。

中国はこの二十年ほどで主としてインフラ面において中央アジアとの協力を推し進めた結果、その影響力は大きく浸透した。しかし、それに対する警戒感も強い。とりわけカザフスタンでは土地に関する法律をめぐって2016年に大規模な抗議行動が起き、政府は慌ててこれを撤回した。当時、著者はカザフスタンに長期滞在していたが、その際の見聞を加えて考えてみても、中国は同国民の間でそれほど好感をもたれていない。

さらに視野を広げてみれば、中央アジアは地政学的に中央ユーラシアのハートランドに位置し、周囲をロシア・中国などのランドパワーに囲まれている。中央アジアの中でもウズベキスタンは、こうした構図を変えるために中央アジアから南下してインド洋に至るルートが不可欠だとしてその開拓に力を入れてきた。ウズベキスタンにとっては、トルクメニスタンやイランを経由してイラン南部のチャルバハール港に至るルートが戦略的に重要であるとされている。しかし、戦火のやまないアフガニスタンや国際的に孤立しているイランが障害となり南下ルートの活性化は困難を伴っている。

以上を踏まえれば、ロシア圏から離脱して代

替的な選択肢を現実化していくのは容易なことではない。中央アジアとしては、そのような足枷の中で少しずつロシア離れを図っていくしかないのである。

注

- 1) <http://kremlin.ru/events/president/news/66181>
- 2) 筆者は独立後のウズベキスタンで、このようなドストエフスキーの発想と同じような考え方に遭遇したことがある。現地のエリートが集まったあるホームパーティーの場では現地語のみならず英語も使われていたが、出席者の一人が曰く、「独立後のウズベキスタンはいわば「新しい西部 (New West)」だ。アメリカが西部を開拓することによって発展したように、ウズベキスタンも自らを開拓

して発展していける」。

- 3) ドストエフスキー (小沼文彦訳), 『作家の日記 6 1880年8月・1881年1月』, 筑摩書房 (ちくま学芸文庫), 1998年, 238頁。
- 4) 「ユーロアトランティズム」ないし「トランスアトランティズム」とも言う。北米・ヨーロッパ諸国の政治的・経済的・軍事的接近に関する地政学的哲学のことであり、具体的には民主主義, 個人主義, 自由, 法の支配などを指す。
- 5) カザフスタンでは、国民が英語・ロシア語・カザフ語の三言語を使えるようにするという三言語政策 (triazychiia) が採られている。しかし、国民の多くはロシア語やカザフ語を使えるため、ほとんどのケースにおいては英語使用の普及を意味している。